

は、観測によつて決定しなければならぬ。それは、平均太陽時との関係から、計算して算出すれば宜い。

自分は、思ふに、この固定望遠鏡による恒星時の直接観測は、よほど興味ある仕事だと思ひ、田上でも、近いうちに實行したいと考へてゐる。

但し、この恒星時の観測には、恒星の赤経を正確に知つて置く必要上、精しい天體曆が要る。しかし、これには、水路部の“天體位置表”があれば充分である。又、若し讀者中に、この種の観測をやる人が澤山あるやうになれば、毎年の天文年鑑にも、これ等の星の赤経を載せたいと思つてゐる。

戦争の發展が將來如何なる所まで行くか、吾々には知れないことだけれど、若し萬一ラヂオの報時が中止されるやうなことがあれば、(又は、何かの理由で毎日の配電が止められ、ラヂオが働かなくなれば)この恒星時の直接観測といふことが、天文家には大變に重要なものとなることは、言ふまでもない。

▲時計の話の序でに——田上天文臺では、フ、ヴル・ブランド製の大型振り時計を八幡の吉田氏から贈られたので、大ドーム内に据え付け、去る七月10日に運轉を始めた。ドームの中は、恒温でないから、このまゝでは、時計の歩みは標準的とは言へないが、始終クロノメータと比較して、誤差を修正して行くつもりである。尙、今のまゝでは、振子の補正が充分でないので、いろんな材料を使つて、今後ゆつくりと振子の研究を續けたいと思つてゐるが、さしあたり、よく枯れた竹材を試験し、それから、ガラス棒、石英棒などを、順に使用して見たい。この時計は、毎時0分と2分とに時鐘が鳴り、又、そのほかの時にも紐を牽けば何回でも時鐘を打つし、又、30分の時にも一つ鐘を打つことになつてゐる珍しい型のもので、よほど以前にスキスで作られたものらしく、外箱は古色蒼然としてゐるが、機械部は確かなものである。

田上では、徑46センチのカルペ鏡を九月17日に東京の小糸製作所に運び込んで、首尾よくアルミ鍍に成功した。これで數年間は鏡面に何の心配も無く観測が出来ることは嬉しい。小さい鏡の類が二つ三つ未だ關西光學に預けてあるがこれ等も近日中にアルミ鍍を終り、すべての準備を完うして秋の研究陣を布かうと考へてゐる。世界を擧げての戦時である。若い人々は皆第一線に、或は銃後の各方面に活躍中である。吾々も學術研究によつて、奉公の實を盡さねばならない。(1943—6—20)

會 告

國家社會及び學界一般の狀勢にかんがみ、諸役員大多數の賛同を得て、今般、本會名を“東亞天文學會”と改めた。

昭和 18 年 九 月

會 長

1943年

十一月の天象

Himmelserscheinungen im November, 1943.

秋の流星に賑はふ筈の十一月であるが、天氣が假りに好くても、月光の關係上、観測は殆んど望みが無い。しかし黄道光は月の初めと終り頃には都合好く見えるだらうし、又、全月にわたり、みごとな遊星面の諸相や、種々の變星、二重星なども、望遠鏡の持ち主を喜ばせるだらう。

太陽は天秤座を運行中で、8日には“立冬”の節となり、43日には“小雪”となる。地球への距離は漸次近づいて来るが、勿論、著しいものではない。黒點の出現は一般的に微弱だけれど、時々は豫想外のものが見えるから、油断はならない。平均太陽は眞太陽の東にあつて、“陽差”は4日に最大(+16:22)となり、其の後は減少する。

月は、5日が上弦、12日が満月、20日が下弦であり、28日が新月で、この日は舊十一月朔に當り、月相60259期が始まる。

水星は、11日に上合し、同時に降交點を通過し、21日には遠日點を通る。全月を通じて、地球からは遠く、太陽に近いため、観望は困難ある。

金星は立派な暁の明星で、4日に昇交點を通過し、16日には太陽より西方へ47°の極大離角となる。餘りに明る過ぎて、黄道光の観測を妨げるだらう。飛行機と見誤らないやう、注意すべきである。光度は初め-4.2、それから漸減。

火星は牛座にあつて、前月末から逆行を始め、視直径は16"を、光度は-1^mを越え、愈々観測の最好期に入る。毎夜、21時頃から、夜明けまで、北半球上の我が日本の頭上にあつて、興味は盡きない。28日は地球へ最近距離である。

木星も亦観測の好期である。毎日夜半以後の東天に、金星と其の光輝を競ひ、視直径は35"内外、11ヶの大小衛星のうち、4つは小望遠鏡でも見える。

土星も牛座にあつて、火星や木星と共に、暁の高い空を飾り、その誇らしい輪の美形は、100倍以上の望遠鏡者を歡喜せしめる。光度は0等、視直径は18.5"。

天王星も亦同じ牛座で、カ星の南方1°ばかりを逆行中。肉眼には見出しにくいけれど、吾等の“年鑑”(天界259號)の第20頁にある圖を頼りとすれば、双眼鏡や小さい望遠鏡によつて容易に見つけられる。光度5.9、視直径4"弱

海王星は金星と前後して東天に現はれ、その位置は“年鑑”第22頁の圖を頼りとして見つけ得るが、之は7糎口径の望遠鏡を必要とする。

冥王星は11日に東留。世界一の望遠鏡を要す。

新彗星や新星の出現を見落さぬやう、毎夜全天を搜索すること。

(18-7-31縮切)

會員に関する報告 [×印は観測部へも入部]

| | | | |
|--------------|------------|------------|-----------|
| 【入會者】 | 阿波根朝宏(満洲) | 王 鐘 遠(中華) | 岡田 智(西宮) |
| 西村 尙美(神戸) | ×高木 嘉雄(東京) | ×北村 得夫(東京) | 柴垣 健(東京) |
| 沖 房之助(堺) | 小田島 晟(札幌) | 中野 仁士(東京) | 秋山 潔(川崎) |
| ×横井 俊雄(京都) | ×石井 共平(西宮) | 高木 四郎(濱松) | 櫻井 芳裕(東京) |
| ×平山 芳雄(大連) | | | |

注意：御移轉の節には直ちに(前住所をも並記して)御通知下さい。観測部の方は其旨附記して下さい。
[東亜天文學會事務局]